
ラブリング

葵 凜香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブリング

【Nコード】

N2039C

【作者名】

葵 凜香

【あらすじ】

大紀と加奈は結婚して半年。お互いを想い合う二人だが、一方で大紀は加奈の親友・美紗と浮気をしていた。いつもの様に美紗に会うつと、彼女の左手には彼氏の恭介からもらった『赤い糸』という名前の指輪が輝いていた。

第一話 Love so Sweet (前書き)

性的な描写がございます。ご了承ください。

ホラーに登録はしておりますが、どちらかと言うとミステリーやサスペンスといった類の作品です。

第一話 Love so Sweet

「まだ起きなくていいの？」

その声でモヤモヤした感覚がだんだんクリアになっていく。

「ねえ大紀^{たいき}ってば、起きないの？」

眠たくて堪らないがとりあえず彼女に聞こえるように喉から無理矢理声を絞り出し、頭上の携帯電話に手を伸ばした。七時二十三分。ディスプレイは優しい光を放ちながら時間を記した。起き上がり声がする方を見るとストレートアイロンで髪をセットする加奈が鏡の越しにおはようと笑顔を見せた。

「昨日遅かったね。ごめんね、先に寝ちゃってて」

「いや、連絡入れなくて悪かったな。棚卸しが合わなくて……参ったよ」

「確かに合わなそう。大紀の店って在庫管理大変そうだね。天井まで商品でごちゃごちゃしてるし」

加奈は仕上げのスプレーを髪に突き付け、鏡の中の自分によしつと笑いかけた。乱れの無いロングのストレート、今日のヘアスタイルもよく似合っていてかわい。まあ欲を言えば柔らかいパーマの方が優しい性格の彼女にはぴったりなのだが。

「そうだ！ 来月のシフト出た？」

加奈は勢い良く振り返った。

「シフト？ 出るには出たんだけど」

俺はベットから立ち上がり、テーブルに放っていたバッグからシフトを取り出し渋々加奈に渡した。

「……やだ、月曜日無いじゃない」

美容師という職業柄毎週月曜日にしか休みが取れない加奈に対し、雑貨屋の店長をしている俺は割と自由にシフトが組める。出来る限り月曜日に合わせて休みを取っているのだが、来月は運悪く店長会

や他のスタッフの希望休が重なり休みが取れなかった。

「結婚指輪、いつ買いに行くの？」

加奈はシフトを見つめたまま少し膨れていた。

加奈と結婚してもう半年になる。付き合い始めたのは七年前、高校二年の時だった。結婚式は挙げたけどなかなか気に入る指輪を見つけれず、俺達は今でも昔買ったペアリングを着けている。

「この前見たセレクトショップのは？」

加奈は膨れたまま首を横に振る。

「妥協したくないの。だって一生物だよ」

「じゃあどっかの月曜に早上がり出来るようにシフト調整してみるよ」

「そう言って今月も全然早上がり出来てないじゃない。……もういいよ、私一人で見に行くから」

「ごめん……」

ムツとしながら俺に背を向けた加奈は肩で一度大きくため息をついてから、また笑顔で振り返った。

いつも俺の前では笑顔ばかり。無理させているかもしれない。だけどそう心配する反面、この笑顔に惚れてる者としてはつられて気持ちいが穏やかになる。

「もういいよ、お互い仕事だししかたないよ。美紗に付き合ってもらおうかな。この前恭介くんに指輪買ってもらったって言ってたしもう行かないと！ 大紀も遅刻しないでよ！」

加奈はもう一度鏡で髪をチェックしてバッグを掴み、俺に軽くキスとして騒々しく部屋を出て行った。

俺は不意に出てきた美紗の名前に自分を落ち着かせるため静かに長く息を吐いた。

美紗と加奈は高校の頃からの友達だ。俺達の結婚披露宴でも美紗は加奈との思い出を振り返り会場の笑いを誘い、感動で包んでくれ

た。あんな心のこもったスピーチを聞いて誰が想像するだろうか、俺と美紗が浮気してるなんて。

美紗との関係は結婚する半年位前から。もちろん加奈との結婚は決まっていたが特に影響は無かった。俺も美紗も言葉の通り『浮気』だからだ。美紗にも恭介という彼氏がいて、すでに結婚の約束もしているそうだ。

眠気覚ましシャワーを浴びて寝室に戻ると携帯がメールを受信していた。

——送信者 美紗 今夜会わない？

俺は迷うことなくOKの返事を送った。どうせ加奈は今日も帰りが遅いはずだから、一言メール送っておけばいいだけの話だ。

夜、美紗と待ち合わせてそのままラブホテルに向かい、たいした話もしないまま交互にシャワーを浴びた。後にシャワーを浴びた美紗はバスタオルに身を包み、束ねていた髪をほつきながら俺の横に座った。俺は自分の右腕に絡められた美紗の左手に光る指輪に目をやった。

「恭介くんにもらったんだって？」

俺の視線をたどり、ああこれね、と目をキラキラながら美紗は顔の前に手をかざした。

「今ちよつと人気になりはじめてるブランドなの。『赤い糸』っていうシリーズなんだけど、ここ、見える？」

そう言つて美紗は手の平側にあるシルバーの指輪に不似合いな透明の小窓を見せた。中には赤い糸が一本通っているのが見えていた。

「ね、赤い糸が入ってるでしょ。これがダイヤモンド粒子で作られた特殊な糸なんだって。ブレスレットもセットでもらっちゃった」

満足げに出した右腕にはお揃いのブレスレットがはめられていた。よく見ると中には『LS』と刻印してある。

「なんなの、LSって」

「このシリーズには必ず付いてるマークみたいなものらしいよ。何かの略かな……『Love so Sweet』とか？」

終始締まりの無い顔で惚える美紗だった。俺は思わず噴出してしまった。

「あはは！ 意外に恭介くんってカワイイな」

有名企業のクールな商社マンの恭介くんに『Love so Sweet』……あまりにミスマツチだ。

「いいの！ 恭ちゃんはおたしにだけはかわいいとこ見せてくれるんだから」

そう言い切ると美紗はまた俺の腕に絡み付いて来た。

「お前おかしいよな。恭介くん恭介くん言ってるのに俺とはやるし。しかも俺は加奈の旦那だぞ？」

「そんなのお互い様じゃない？ 大紀だって加奈のことあんなに好きなのにあたしのこと拒まないじゃない」

美紗は腕に一層力を込めた。

「そういうのって男と女で考え方違うもんなんじゃないの？」

「男とか女じゃなくて個人の問題じゃない。大紀とおたしは似てるのよ、絶対。でもあたしは大紀という時も心の中は恭ちゃんदैっぱいだよ」

美紗は堂々と言い切って薬指のリングに優しく口づけをした。

「……何かムカツク」

そう呟いて俺は無理やり美紗の唇を奪った。軽いキスじゃない、この瞬間のすべてを独占するために俺は美紗を追ひ、絡めとって自分の側に引き込んだ。

美紗が恭介くんを想う気持ちはわかる。俺だって誰を抱いていても自分に余裕がなくなるほどに加奈のことが頭の中を占めていく。美紗の言うとおり俺達は似た者同士なのかもしれない。加奈を愛している。でも不意に顔を出したこの独占欲の沈め方を知らないから、

俺は美紗を必死で求めるのだ。

美紗が呼吸を乱し、苦しみ混じりに声を漏らすから、唇を開放してそのまま首筋、胸、腹、太ももへと舌を滑らせた。

クーラーを付け忘れお互いの上昇する体温で身体はじつとりと汗ばんでいた。

潤んだその部分を指でなぞると美紗の身体は弓なりに沿ってみせた。閉じようとする足を片手で押さえつけ、もう一方の手を中へと進ませた。小さな歓喜の声と共に収縮する内面をゆっくりと探りながら、少し上にあるもう一つの性感帯に舌を這わせた。美紗は声量を上げてまた弓なりになりながら俺の髪の毛を掴んだ。

「んっ……あっ……イタイ……」

美紗の声で荒々しく動かしていた二本の指を止めた。

「ごめん、痛かった？」

一度身体を起こして汗を拭いながら尋ねると、美紗は右の手首を押さえていた。……美紗？ 声をかけようとした瞬間耳にキューーンという音がした。インスタントカメラのフラッシュを準備する時の音、耳鳴りかとも思った。

「痛い！ 痛いっ！ 痛いーっ！！」

突然美紗はベットの上をのた打ち回り始めた。何が起きている？ 何なんだ？！ 完全に気が抜けていた俺は美紗に蹴り飛ばされ、啞然とその様子を見ていた。

「いやーっ！ 痛い痛い痛い！！ ああああ！！！！」

美紗は泣き叫び暴れ続け、押さえていた右の手首からは血が流れ、真っ白なシーツをどんどん赤く染め上げて行く。

「美紗？！ おい美紗！！」

跳ね除けられながらもやっと美紗を抱きしめた時に一段と大きな叫び声が響いた。

美紗の右手首から先がぼとりと落ちた。主人を失ったソレはコロコロとベットから転がり落ちピクリとも動かなくなった。さっきま

で暑くてたまらなかったのに俺はもう汗を一滴もかいていなかった。

「……き、救急車」

我に返り電話の受話器を握りフロントの番号を押したが、追ってきた美紗が左手でダンツと電話を切った。

「チエックアウトして……行く……ここはやばいよ……」

睨むような眼差しで強くそう言い放ち美紗は黙々と服を着替え始めた。右手首からは出血が続いていたのでとりあえずシーツの切れ端で止血措置を取った。

着替え終えた美紗は痛み表情を歪めながら落ちた右手を掴み上げ、俺にもたれかかった。青ざめた額からは玉のような汗が次々と現れていた。

俺は落ちていたブレスレットを拾って急いで病院に向かった。

第二話 L i a r h a s S a n c t i o n s

「一体何をしたらこんなことに……」

駆け込んだ近場の診療所の若い医師はもう何度この言葉を口にしたらだろう。美紗の症状がおかしいのは素人の俺でも解った。

止血の為にと切断部分に巻き付けていたシートに血はほとんど染みていなかった。俺が昔、腕を金網でバツサリ切ってしまった時は開いた傷口から圧迫しても止まらないほどの血が流れた。今回は傷口どころか断ち切られているのだから、腕を縛ったくらいで止まるわけではない。でも診療所に着いた時にはもう完全に止血していたのだ。

縛っていたシートを外して更に驚いた。ちぎれて肉も骨も剥き出しだった切断面は皮膚で覆われ、傷痕一つ無いキレイな状態だった。まるで右手なんて初めから無かったように。

なぜ美紗はこんなことに……。考えは廻らずただ処置の様子を見ていることしか出来なかった。

「先生、あの手の原因は何なんですか？」

処置を終えた医師はもう一度美紗の腕を診ながら眉間に皺を寄せた。

「原因？ それはこちらがお聞きしたいです。ありえないんですよ、こんなことは」

「美紗……彼女の症状はどうなんですか？」

医師はデスクに腰掛け頭を掻きながらカルテに目を通した。

「出血量もさほど多くないですから命に関わりません。ただ……」
カルテを捲りながら息を吐き、申し訳なさそうに一言、手は残念ですがと呟いた。診察室には美紗のすすり泣きが響き、重たく冷たい空気が充満していた。

「美紗！」

ガタンツと大きな音を立てて診察室のドアが開き、少し前に連絡を入れておいた恭介くんが姿を見せた。スーツを乱した恭介くんは俺には目もくれず、ベットに腰掛けた美紗の元に向かい右腕に視線を落とした。

「恭ちゃん……ごめんなさいっ」

美紗は明らかに動揺した様子で号泣し始め、でも顔を上げようとしなかった。

「話は家で聞くから、さあ帰ろう」

恭介くんは美紗を支えるように抱き上げ、診療室を後にしようとした。

「ちょっと待って下さい！」

呼び止めたのは医師だった。

「今日は入院しませんか？ またどんな症状が出るかわかりませんし」

「いいんです！ あたしもう大丈夫ですから！」

美紗は振り向かず医師の言葉を強く封じた。

車まで二人に付き添い先に美紗を車に乗せると、恭介くんは勢いよく俺の胸ぐらを掴んだ。歯を食いしばり息を荒げ、見開いた目で睨み付け、力任せに俺を投げ倒した。

俺と美紗はホテルにいた。それもセックスの最中に手首が切れた。ただそれがバレた訳はない。でも恭介くんは倒れ込んだ俺に言葉を吐き捨てて去って行った。

「美紗がああなったのはお前のせいだからな！」

「おかえり。美紗の怪我、どうだったの？」

自宅で加奈に出迎えられたのは日にちを跨ぎ午前二時を過ぎてか

らだった。

加奈には『飲み屋で偶然美紗に会った。怪我をしてるから病院に連れて行く』そんな内容のメールを送りっぱなしで何度かあった折り返し連絡に対応しなかったから、美紗のことを酷く心配していた。「右手首から先を切断してる」

疲れていた俺は容態だけを簡潔に告げて冷蔵庫からペットボトルを取り出し冷水を乾いた喉に流し込んだ。目を閉じると痛みに転げまわる美紗の姿が映った。隣で加奈が美紗のことを聞いているが俺はそれに一つ一つ答えられるほど元気じゃなかった。

「ねえ、美紗に会ったのって本当に偶然なの？」

突然トーンを落とした加奈の声に一瞬身が硬直した。冷静を装ってゆっくり振り向くと加奈は腕を組み無表情で俺を見ていた。

「何か疑ってんの？」

「だってタイミングいいじゃない。浮気なんてしてないよね？」

「なんだよそれ、美紗はお前の親友だろ？俺のこと信用出来ない？」

こんなに冷静に嘘をつくのは初めてかもしれない。加奈の目を見つめてそう言くと、加奈はごめんと呟いて寝室に入った。俺も程なく寝室に向かい加奈を抱きしめて眠ることにした。あんな光景を見た後で心細かった。それに加奈に対する罪悪感もあった。愛してるのはお前だけだからと強く思いながら俺は眠りについた。

美紗の元を訪れたのはそれから一週間ほど経った頃だった。

あれから心配して数回電話をかけたリメールしたりしたけど美紗から返事が来ることは無かった。仕事が休みの加奈が午後から様子を見に行くと言ったので、俺は仕事が始まる前に美紗の家に寄ることにした。

美紗は恭介くんと二人暮らし。部屋の前に行きチャイムを鳴らすとドアは開かれたが、チェーンロックは掛けたまま。美紗は来客が俺だと分かってもチェーンを外そうとはしなかった。

ドアの隙間から覗かせているその顔は急激にやつれ、目の下には黒々としたクマがあり、別人のように暗い表情をしていた。

「手の具合はどう？」

美紗は先の無い右手を左手でゆっくりと撫でながら静かに首を振った。それが大丈夫を意味しているのかやっぱりダメを意味しているのか、問い返すことは出来なかった。

キラリと光が目につき、よく見ると美紗の左手にはこの前の指輪とお揃いのブレスレットが付けられていた。あれ？ この前のブレスレットは俺が拾って帰ったはず。確かこのバックに入れてるんだけど……。

「美紗、そのブレスレットって……」

「触らないで！」

隙間から手でブレスレットに触ろうとすると、美紗は大声を上げて左手を遠ざけた。美紗は涙を流しながら俺を睨み付け、二人の間には沈黙が流れた。

「……もう大紀とは会わない。あたし、恭ちゃんが怖い。あんな思いはもうしたくないの。バイバイ」

美紗は俺を見ずに静かに呟きドアを閉めた。

俺は状況がよく飲み込めないまま美紗の家を後にした。

職場に着いてもうわの空だった。美紗の右手首が切断された事、俺との浮気、そして美紗の左手の指輪と新しいブレスレット……あんな思いはもうしたくない……恭介くんが怖い……。全ては関係しているということだろうか。そう言えば恭介くんも美紗の怪我は俺のせいだと言った。俺が一体何をしたって言うんだ。

ポケットに入れておいた美紗のブレスレットを取り出し、その事ばかりを考えていると、しゃがんでいる俺の太腿の上に真っ赤なマニキュアの女性の手首がトンツと置かれた。

「うわぁー!!」

大声で叫びバランスを崩して後ろに倒れると、手首はゴトンと音を立てて床に落ちた。

「ごめん、ごめん!」

慌てて手首を拾い俺の前にしゃがみ込んだのはスタッフの亜矢子さんだった。

「手首模型でこんなに驚くなんて思わなくって。本当にごめんね」

俺より二つ年上の彼女は顔の前で手を合わせて謝り、店の商品の手首模型を元の売り場に戻した。立ち上がると自分が情けなくなり苦笑いが零れた。

「これ店長のよね?」

亜矢子さんはそういいながら床からブレスレットを拾い上げた。

「あつ、『赤い糸』シリーズだ。あれ? でも赤い糸入ってないよ!」
「えつ、ちよつと貸して!」

俺は亜矢子さんからブレスレットを取り返し、透明の小窓を覗いた。無い。赤い糸が入ってない! さらに内側を見ると『LS』の刻印も無くなっていて、代わりに別の言葉が彫ってあった。

『a L i a r h a s S a n c t i o n s』

「これ……なんて意味? 嘘つきは(L i a r) 持つ(h a s) ……?」

『S a n c t i o n s』の意味が分からない。イラつき、頭をもたげていると亜矢子さんが俺の手からスルリとブレスレットを奪った。

「これって何かあるのかな? あたしも元彼からもらったのよ、『赤い糸』の指輪とブレスレット。でもブレスレットは、一生俺だけを愛する覚悟が出来たら着けてくれって言われた」

「何それ……?」

亜矢子さんは首をかしげながら俺にブレスレットを返した。

「さあ？ あたし結局指輪しか着けなかったから。よかったら見に来る？ 自宅に指輪もブレスレットも置いてるよ」

「じゃあ……」

即答をしようとした瞬間、携帯が震えた。サブディスプレイには加奈の名前が出ていた。

——今日は早上がり出来る？ 一緒に指輪見に行かない？

俺は加奈に素早く断りの返事をし、亜矢子さんに家に行くことを伝えた。加奈には悪いが俺は美紗の手首が切れた原因とこのブレスレットの関係が気になって仕方が無かった。

仕事を終えて俺は亜矢子さんと一緒に彼女の家に向かった。

事件の謎のことが頭の中を占めていて、まさか亜矢子さんと二人で歩いているところを加奈に見られていたなんて考えもなかった。

第三話 a t L e a s t S t r u c t u r e

亜矢子さんの家に着いてとりあえず出してもらった指輪とブレスレットを細部までじっくり凝視した。あの時拾った美紗のブレスレットには内側に大きな溝があるのに、亜矢子さんのそれは溝など見当たらなかった。

あまりに真剣にそれらを見ている俺を不思議に思ったのか、亜矢子さんはパソコンの電源を入れてマウスをカチカチと鳴らした。

「店長、これ見る？」

ディスプレイに目を向けるとそこには眩しいくらい真っ白な壁紙が広がっていた。

『一生涯の約束の証をラブリングに
愛する人とあなたをつなぐ——<赤い糸>』

画面の中央には赤い文字でくつきりとそう記されていた。
指輪のブランドのサイトだった。

マウスを借りてスクロールして行くと『ダイヤモンド粒子の赤い糸』とか『シンプルなデザインは男女を問いません』とか美紗から聞いたような文句が綴られていた。

でも商品紹介のページにも備え付けの掲示板にもブレスレットに関する記述は全く無い。不思議に思いながらページを最下部までスクロールすると『ブレスレット購入希望の方へ』と黒い文字で書かれたリンクが貼り付けてあった。やっと見つけた……そう思いながらリンクをクリックした。開いたページには『パスワードを入力してください L S 』という一文とテキストボックスがあった。

パスワード……これは？

「ねえ真剣に何調べてるの？」

横から興味津々に画面を覗く亜矢子さんを無視していると、彼女

は小声でぶつぶつと呟きながらキッチンの方向に向かった。程なく食器の触れ合う音が響き始めたのでおそらくお茶でもを入れてくれるのだろう。頭の隅でそんなことを感じながら俺は美紗のブレスレットを左手に、右手でキーボードを叩いた。『LS』……思い当たるパスワードは一つしかなかった。

『a L i a r h a s S a n c t i o n s』

焦る気持ちを抑え一文字ずつ正確に打ち込みエンターを押すと画面は一変、真っ黒な壁紙に白い文字が浮かび上がった。

『a L i a r h a s S a n c t i o n s』

嘘つきには制裁を――

ラブリングが裏切り者を裁きます。』

制裁……そのキャッチコピーはブレスレットへの不信感を煽るには十分な物だった。脳裏に映った美紗の生々しく悶絶する姿を大きなため息で振り払い、俺は画面をスクロールさせた。

利用者の声、購入方法、新商品のお知らせ……文字だけで淡々と構成されているコンテンツから俺はブレスレットのしくみと言うページを開いた。

まず赤で大きく記された『警告』と文字が目を引いた。

『よく理解して頂いた上でご購入下さい。』

また、必ずあなたのパートナーにご利用下さい。

くれぐれも慎重に、一歩間違えば取り返しのつかない事になります。

』

何とも物騒な内容にただ事でない雰囲気を感じながら画面を下つた。

『まずユーザー登録を行います。
あなたとパートナーの体液（汗・唾液・精液等）を指輪の小窓から
染み込ませて下さい。』

あとはパートナーにブレスレットを着けるだけです。』

えらく簡単に綴られた使い方。これを読んでもまだ話が繋がらなかった。でもページをさらにスクロールさせるとやっと点が線で繋がった。

『このブレスレットが作動するには二つの条件があります。』

一つは着用者が性的興奮状態にあること。（心拍数と血流、発汗量などから計測）

そしてその状態で指輪に登録されたお二人以外の体液が付着した場合。

以上二点が確認されるとブレスレットに信号が送られ、赤い糸が絞まり手首を切断致します。』

やはり美紗の手首を奪ったのはこのブレスレットだった。目の前の信じられない現実には唇を噛んだ。

『瞬間縫合技術により、切り口はきちんと隠れます。』

失血多量で大事に至ることはありませんのでご安心下さい。』

……何が安心だ。死ななければそれでいいのか？

美沙は俺と浮気をしていた。それに感じた恭介くんが美沙にブレスレットを着けたのか。そしてセックスの最中に付いた俺の汗に反応して、赤い糸が美沙の右手を奪った。理解が出来ない。ただの浮気だろうか？ やりすぎじゃないか！

「何かわかった？」

その声で我に返りコーヒーの苦い香りに神経が集中した。両手に持ったカップをテーブルに置きながら亜矢子さんがディスプレイを覗き込んだ。俺は慌ててマウスを手に取り画面を消した。

「別にただのブレスレットみたい。ネット貸してくれてありがとう」
そう言っただけ俺は亜矢子さんの指輪とブレスレットを元あった箱の中にしまった。

「ふーん、それよりコーヒー飲まない？」

亜矢子さんはブレスレットの事には触れず、床に座りながら俺に「コーヒーを勧めた。これ以上話を聞かなくなかったから彼女の無関心がありがたかった。俺はソファに座り、コーヒーに手を伸ばした。」

「ねえ亜矢子さん、浮気ってダメな事かな？」

「ふふっ、なにそれ？」

脈絡の無い質問に亜矢子さんはカップを両手で包みこんで小さく笑った。

「ダメなんじゃない？ 店長は奥さんいるんだし」

そんな事は解ってる。ただそれはあんな罰を受けないといけない事なのか聞きたいんだ。

「店長浮気してるの？」

「……いや、最近終わった。相手が彼氏にバレたみたいで」

「そう。その子のこと好きだったの？」

「別に。そんなんじゃないけど」

「じゃあさ、じゃあさ！」

フローリングの床に座っていた亜矢子さんは胸まである茶色い巻き髪を揺らしながら「コーヒーカップと一緒にソファにいる俺の隣に座り直した。その表情はまるで子供みたいに無邪気な笑顔だった。」

「あたしとする？」

「……は？」

何でそうなるんだ？

「だって店長は浮気オツケーな人なんでしょ？ あたしは彼氏と別れて相手いないし」

冷静になろうとしても迫る亜矢子さんの開いた胸元が視界に入り心臓は高鳴った。

「それに店長最近イライラが酷いよ。何か忘れるにはエッチが一番！ そう思わない？」

やればスツキリするか……いやいや、そんなウマイ話があるか？ 美紗と終わってすぐ次なんて……。

あくまで冷静に考えを巡らせていると、煮え切らないなあと思き、亜矢子さんは唇を重ねて来た。

すぐに唇を離れた亜矢子さんは少しの沈黙の後に小さく笑いながら俺の太腿を股越し、向かい合って座った。捲くれ上がったスカートからは細すぎるくらいの脚が視界の端に白く映った。その白は亜矢子さんがキャミソールを脱いで更に面積を増やして行く。乱れた髪を掻き上げながら亜矢子さんはもう一度唇を合わせた。今度は音を立てながら俺の口に割り入って舌で丁寧に歯列をなぞった。

いきなりの状況にされるがまま。亜矢子さんは楽しげに微笑みながら首に腕を回して体を密着させた。服を着ているとは言え、局部の上でいたずらに腰を動かされると刺激が強すぎる。

もういいや、別に抵抗する気も無いし。俺は亜矢子さんの腰と胸に手をかけてソファに倒した。

亜矢子さんの艶のある声が頭の中の余計な事を全て拭い去り、ただ欲のままに動いた。上り詰める瞬間だけはやっぱり加奈の顔が浮かび、俺は心身共に満たされていた。

第四話 Last Smile .

「仕事忙しそうだね」

自宅に帰ると加奈がテレビを見ながら俺の帰りを待っていた。

「あー、なんかいろいろね」

冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し喉に流し込んだ。外は夜になってもまだ暑く、火照った体に冷たい水が流れて行くのが分かった。

ひとつ伸びをしてソファから立ち上がった加奈はテレビを消して一度寝室に向かってからキッチンに戻って来た。

「今日ね、店の外で大紀のこと見たんだよ。女の人と一緒にだった」
さらりと告げられた加奈の言葉で飲んだ水より冷たい物が背中を流れた。

「見間違いないじゃない？ 俺さっきまで店にいたし」

動揺を悟られないように表情を隠しながら冷蔵庫にペットボトルをなおしていると、やっぱり見間違いだよね、と加奈は笑いながら椅子に座った。テーブルの上には白い紙の袋が置かれていた。

「なにそれ？」

そう聞くと加奈はニコニコ笑いながらとりあえず座るように促した。

白い袋からは白い長方形の小箱が取り出されて、俺は目の前に差し出されたそれを開いた。

「時間なかなか合わないから買っちゃったよ」

箱の中にはシルバーの指輪が二つ並んでいた。

「いろいろ迷っただけだよっぴりシンプルなのがいいかなってね、はめてよ」

突き出された加奈の左手と小箱の中の小さい方の指輪を手に取り、静かにその指にはめた。加奈は満面の笑みを浮かべながら手を自分

の目の前に引いて右手で包み込み、その笑みを俺に向けた。

「ありがと。じゃあ次は大紀の番ね。手出して」

「なんか照れるな、こういうのって」

俺は軽く右手で左の薬指を擦ってから加奈に委ねた。

「この指輪ね」

箱から丁寧にもう一つの指輪を取り出す加奈。

「美紗たちと同じブランドのなんだよ」

俺の左手を支える加奈の指輪から透明の小窓が見えた。その中にはあの忌まわしい赤い糸――。

「恭介くんに薦めてもらったの」

そんなことお構いなしにしゃべり続ける加奈は指輪をすでに第一関節まで通していた。決定打とも言える『恭介くん』という言葉に俺は思わず手を引いた。

「……大紀？」

「ブレスレットは？」

「ブレスレット？ 何それ？」

四本の指で指輪を支えたまま加奈は不思議そうに眉間に皺を寄せた。

「ごめん、何か勘違いしてたかも」

我ながら意味不明な弁解。俺は動揺を隠すように急いで手を差し出した。

もう浮気は出来ない。俺は諦めるように決意を固めていた。

「私は一生大紀だけよ。大紀も私だけ愛してくれる？」

「当たり前だろ」

加奈の上目づかいに笑顔で答えると一瞬、薬指からはゾクリとするほどの冷たさが伝わった。でもそれはすぐに加奈の手の暖かさに変わった。

左手を開くと薬指の付け根にその存在を示す赤い糸。浮気は駄目だ。

美紗の二の舞なんてまっぴらだ！

「……！」

だが左の手首をなぞりながらハツとした。ブレスレットは無いんだ。指輪しかしていない俺の手首を切る物が無い。

じゃあこの指が？ …… いやそれは無い。人気が出てきているこのシリーズの指輪を着けた人間は数え切れないほどいるはず。その中に浮気してるヤツがどれだけいる？ 浮気に限ったことじゃない、風俗だってあの条件にあてはまる。そんな事になっていればもっと大きな騒ぎになってるはずだ。

この指輪はただのセンサーにすぎないんだ。ブレスレットが無ければただの指輪に違いない。だからこそホームページでもブレスレットだけは厳重に扱っていたんだ！

数日後、その確信を持った時、俺は思わず口角を上げた。

警戒をしながら亜矢子さんと寝た時はさすがに緊張が解けなかったし、細心の注意も払った。亜矢子さんが俺の手を自分の汗ばんだ胸に触れさせた時は思わず目を固く閉じた。でもやはり何も起こらなかった。俺の読みは当たっていた。

俺は今まで通り浮気を続けた。セックスの相性というのだろうか、亜矢子さんとのそれは最高に良く、離れられる気もしなかった。

俺は美紗との時以上に亜矢子さんと二人の時間を過ごし、お互いを求めるのも当たり前前の行為になっていた。

猛暑の日々を越え秋風が吹き始めた頃、俺と加奈は些細な言い争いをするようになった。

「やっぱり最近遅いよね」

就業後に亜矢子さんの家に行き、足早に帰宅すると加奈はもう帰

っていた。前までは予定が無い限り俺の方が先に帰っていた。でも最近では玄関の外から部屋の明かりを見ることが増えた。

「……大紀、浮気なんてしてないよね？ 本当に……」

最近一番多い加奈からの問い。

「してないって。お前最近そればかりだな」

俺も最初の頃ほどこの問いに動揺することも無くなっていた。むしろ慣れてしまつてうんざりしてるくらいだ。

「だって前はこんなに毎日帰り遅くなかったじゃない！」

「仕事だつて言ってるだろ？ 浮気、浮気つて、帰りが遅くなつたら何でも浮気か？！」

俺は疲れていた。何に？ 仕事かセックスか、それとも加奈にか？ そんなこと考えるのも面倒なくらい疲れていた。

俺に睨まれ怒鳴りつけられた加奈は固く唇を噛み、必死で俺を睨み返していた。

「なにその目。言いたいことあるなら言ってみるよ」

どこからこんな強気な言葉が出て来るのか、自分でも少し変な感覚。でもこの征服感は嫌いじゃない。

「……もういいよ……もういい」

加奈は搾り出すようにそう呟き俺に背を向けた。そのまま寝室の方に歩み、扉の隣のサイドテーブルに置いてあった卓上カレンダーを手にして、振り向きざまに俺に投げつけた。力無く俺の上半身に触れた十二枚のカードは床に散らばり、その中から派手に色を塗られた一枚を拾い上げた。今日の欄に書かれた文字に俺は思わず頭を抱えた。

『大紀 加奈 はじまりの日 8周年！』

正直、日にちまで覚えていない。加奈が今日だつて言うなら間違いないはず。八年前の俺が告白して加奈と付き合い始めたんだ。あの日の加奈は今でも目に焼きついている。あの笑顔を独り占め出来

たと思った瞬間の快感が胸に蘇った。

「加奈……」

ボロボロと涙を流しながら加奈は俺から視線を逸らし寝室に入った。扉が閉まると同時にカチャリと施錠の音が響き、それっきり加奈は出て来ようとしなかった。

「ごめん」

きつと聞こえてないと思う。俺はそのまま力なくリビングのソファに体を沈ませた。

明日きちんと謝ろう。記念日を忘れてたこと、加奈の気も知らないで怒鳴ったこと、それと……

気持ちが纏まらないままゆっくりと眠りに落ちた。とにかく今日は疲れていたんだ。

翌日、目を覚ますと加奈はもう家を出ていた。

『冷蔵庫にアイスコーヒー入ってるよ』

メモに目をやりグラスに冷えたアイスコーヒーを注いで、その隣にあったメモに手をかけた。

『大紀へ』

昨日はごめん。

疲れてるのに疑ってばかりで、大紀が怒るのも無理ないよね。

私は大紀が言った事信じてるから。

これからももずーっと仲良くしようね。

加奈より』

深い深いため息が出た。加奈に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。視界の端で光を放つシルバーリングを右手で包み俺は心から詫びた。そして決めたんだ。

「やっぱり浮気は止めよう」

もう一度、いや、これから先ずっと加奈の笑顔を見ていたい。俺は心からそう思った。

「店長、今日もうち来てくれるよね？」

亜矢子さんがいつものように聞いてきたのはその日の夕方頃だった。

「悪いけど、行けないんだ」

「なに、用事？　じゃあ明日ね！」

手短かに用件だけを告げて去ろうとする亜矢子さんの腕を慌てて掴んだ。

「そうじゃなくて、もう終わりにしたいんだけど」

聞こえるか聞こえないかの小さな声でそう言うとき亜矢子さんの顔はみるみる曇っていった。

「奥さんにバレちゃったの？」

「そうじゃないけど」

「いきなり終わりとかな勝手じゃない？！」

店内にお客さんがいないのは幸いだったけど、俺は誰かに聞かれてるんじゃないかと冷や冷やししながら亜矢子さんを制した。

「勝手ってわかってるけど……ごめん」

「どうしても？」

「どうしても」

「……じゃあ今日で最後！」

亜矢子さんは人差し指を一本立てて満面の笑みで提案して、ね！と強引に意見を通して店の奥に行ってしまった。ちよつと……そう小さく声には出したけど、亜矢子さんに聞こえる訳がない。それに俺自身、本能がその提案を否定する気が無いように感じた。最後にもう一度亜矢子さんを抱きたい。本当に最後だから、もう一度あの快感を、と。

最後だと言われると自分がこれまでに無いほど熱くなっているのがわかった。

亜矢子さんの部屋に入るなりリビングに着くなり彼女の腰を引き、唇を深く合わせ、両手はブラのホックを外しにかかった。舌をお互いの中に行き来させながら服の中に両手を入れ、緩めたブラの下から胸を掴むと室内には二人の荒い息遣いだけでなく亜矢子さんの甘美な声も響いた。

「ちよつと店長、落ち着いてよ」

亜矢子さんは俺の顔を両手で挟み強引に視線を合わせた。

「あたしは逃げたりしないんだし今日はゆっくり楽しもう」

そう言つて着ていたニットとショートパンツの抜き捨てられたブラを放り投げるとおれの手を引きベットに向かった。

「今日はあたしにいろいろやらせて」

微笑んだ亜矢子さんは俺に覆いかぶさつて短くキス。

腹から脇にかけて両手を這わせながら俺のシャツを脱がせ、股間を指でなぞりながらベルトとチャックを外した。狭いジーンズから開放されボクサーパンツ一枚になった俺の腹に亜矢子さんは跨り、右手を自分の胸に誘導した。決して大きくは無いが形と触感がいいその胸をゆっくり触れると亜矢子さんはまた俺に笑いかけた。反対の手も胸にかけようとする亜矢子さんはそれを両手で包み、静かに唇を寄せた。

「やっぱり店長は奥さんの所に戻っちゃうんだ」

亜矢子さんは俺の手のひらに舌を這わせ親指を口に含んだ。水音を立てながら指全体を舌が這い回り、時折第一関節の窪みを執拗に舐めあげる仕草に一段と欲情した。

「本気なんだなって……ちよつと嫉妬しそう」

胸から与えられている感覚に反応しながら亜矢子さんは途切れ途切れの言葉は綴った。

口が親指から離れた隙に次は口の中に人差し指と中指を入れた。

亜矢子さんは二本の指を吸い上げながら丁寧な根元から先まで舌で

なぞった。

「奥さんとおそろいなのか？新しい赤い糸シリーズなんて着けちゃって」

「……赤い糸？」

その単語にあの日の美紗が浮かんだ。

思わず手を止め上半身を起こした。

「……？　どうかした？」

腰を浮かし腹から太ももに座る場所を変えながら亜矢子さんは俺の顔を覗いた。

「新しい赤い糸ってなに？」

亜矢子さんに委ねている左手にも目の前にある右手にもブレスレットなんて着いてない！

「新しいってなんなんだよ！」

頭から耳、顔を叩くように確認すると胸の辺りで固いものに触れた。

「どうしたの、そのことよ。そのネックレス」

「……………ネックレス？」

亜矢子さんは俺の胸元に手を伸ばし、チェーンで首から下がっている楕円形のシルバーの塊を目の前にかざした。

おそろいおそろいその楕円のペンダントトップに目をやると、モチーフの中には『LS』の刻印と忌々しい赤い糸。しかもその赤はネックレスのチェーンに編み込まれ俺の首を一周していた。この前ホームページで目にした『新商品のお知らせ』の項目が頭をよぎった。

俺に制裁を下すのはブレスレットじゃない！　このネックレスだ！！

昨日まではこんな物着けてなかった。

「……………加奈か？！　そうだ、俺の寝ている間に……………」

切れるのは当然、首だ。……………殺される！

混乱しながらブツブツ呟く俺の様子を黙って見ていた亜矢子さんがクスリと笑った。

「なんなのよいきなり……変なの」

そう言って亜矢子さんは舌でぺろりと薬指の指輪を舐めた。

「やめろー!」

そう叫んで亜矢子さんを突き飛ばした時にはもう遅かった。耳元で聞き覚えのある音が響いた。インスタントカメラのフラッシュを準備するような、耳鳴りのような、キューーンという音が。

「う、うわああー……っ!……!」

叫び声を上げた瞬間、首に凄まじい圧力がかかった。どんなに首を掻きまわろうとも糸は全く爪に引つかからない。真つ赤に染まっていく自分の四肢。苦しいのに声が出ない。耳に響くのは美紗のと同じ、糸が締まる音と女の叫び声だけだった。

薄れ行く意識の中、やっぱり俺は加奈を想った。俺が死んだと聞いて加奈は泣くだろうか。……いや、きっと笑っているだろう。俺が大好きなあの笑顔で。

— a L i a r h a s S a n c t i o n s

嘘つきには制裁を——

ラブリングが裏切り者を裁きます

F i n .

第四話 Last Smile・(後書き)

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。ご感想も
いただけると幸いです。***Special Thanks.
伊勢やん***

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2039c/>

ラブリング

2010年10月8日15時47分発行